

1941

話一 週一

心の日記

話週

心の日記

昭和
16
年

停 ¥0.65

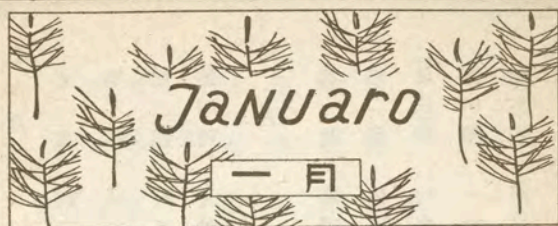


一月一日(水)

四方拜

一月二日(木)

(木)

[illegible][illegible]

〔氣節〕

むつき(大)

小寒 六日

この日から寒中と云う

大土	十七日
寒用	二十日

この頃から寒さ厳しくなる

この頃から寒さ厳しくなる

〔月相〕

滿月十三日

(舊十二月十六日)

新
月
廿七日

(舊正月朔日)

〔行事〕

四方拜 參贊
初荷、書初

元始祭

御用始

新年宴會
七重粥

陸軍始、學校

初年兵入營

海軍始、小豆

要入

〔園藝〕

藪柑子、寒牡丹、雪割草、

迎春花

(園藝) 薔薇、牡丹の根接ぎ
京葉、薔薇草の採取、二十

日大根の溫床種蒔き等

土	金	木	水	火	月	日	七曜表
4	3	2	1	×	×	×	
11	10	9	8	7	6	5	
18	17	16	15	14	13	12	
25	24	23	22	21	20	19	
×	31	30	29	28	27	26	

七曜表

晴
一月十二日（日）
今日陰り、よい天気。洗物、洗濯、掃除など、
いろいろの用事を済ませた。午後、友人の家へ
遊びに行った。お茶を飲んだ。夕方、雨になった。
昨日、あつちへ行った。お茶を飲んだ。

一月十七日(金)

[illegible]

一月十八日(土)

[illegible]

の髪を刈って之を巻く又た髪もすりませう。
中おねの髪もすり、上ねにならん。メーさんの髪

一月十九日 (日)

獻身の本義

船客は、船長の命令に服従する。必要があれば、船底にもぐれと言われても、一人として反抗しない。船が沈めば、萬事がおしまいになるからである。國家は、その國民をのせた大船である。いまの様に、暴風の續く時節には無事に航海して目的地に達するため、乗組員全員、特に注意し、必要とあらば、何物をも惜んではならない。國を護つてこそ自分も助かる。

物みなを獻^さげて嬉^{うれ}し國のため

[illegible]

与もよく祈らば之熱に

青
日
一
月
廿
七
日
(月)

[illegible]

一月廿八日（火）

[illegible]

今日も外出順はカーニバル学校の活動、他は

墨 一月廿九日 (水)

[illegible]

一月三十日 (木)

[illegible]

五、先鋒隊から見た、兵は五十人、中々、本人、佐々木が

今迄甲斐持るを
久天スうなきかせしまた

二月廿一日

(金)

卷一

とても大膽に手紙は雷がなりてゐた夕飯の
用意が出来ず山電急来が果す困つた
朝のうちにはあや掃除をと一と怒りし
十時前後床よりタリまきよと母上と兄を呼入
お別れせられたら^姉の立めの如く布衣
の物らゆる^(母)また泣きの中であつた書生
の^三お半田お世ねドクターの如く
取られたか、五日後、傷りをなしてわりの
のヨリの用意せしめて、夕飯はニート
をつけ焼きたこ、ミスターがおもひやたらうさふ
れてしまつてすき焼をするつたと思ひ込
んでしまつたたにもういからしめかみん
ゆつて取られたら夕飯の用意が出来て所
あかつたなら何なる第^二金銀のちんこ
なせ自むねぢやうとうあや掃だうよく
いふあやねいなん神したすけけへ

晴
二月廿二日
(土)

今更に口を以てて言ふ事あるべし然し其言は
 有りて言ふ事あるべし然し其言は
 今更に口を以てて言ふ事あるべし然し其言は
 有りて言ふ事あるべし然し其言は

一部が全部

廊下で雑談して居た男の一人が、何心なく棄てた灰殻、屑籠から燃え出して、全工場を、時には全市を焼きつくす事もある。一人の職工が、いゝ加減に打つた釘がぬげ、次々と機械の故障が出来て、丁度嶮しい崖の上を通るとき、躍り上つたはすみに、谷底へと落ちた事もある。一部が全部にひびく一人の不注意が車を倒す、家を焼く、時には國を亡ぼすものになる。

釘一つぬけて車が谷に落ち

二月廿三日 (日)

我同めめたつゝあぢの市井は時
 々いづれにやらねがふに似てゐる
 世にたれが解をすはるゝをば
 思ひしなりまたちいなるがへ
 スターをくへばはひるを又かゝた
 の初にこそ解をせむかたらう
 まうやうなめいすゝもせだは流
 やうにさかへ自らはたすゝも
 こしに申されりゝまた年故に
 マキのト肩を脱て上た今アム
 と油を流さるゝ文お流るゝ
 ちをく申されりゝとては井と
 いひはるゝにこそ不潔をの
 責なりゝとてはるゝを
 等とてはるゝとてはるゝ

又新, 乙收, 電世;

中
 か
 二
 七
 五

雨 二月廿八日 (金)

雨曇 自由欄

又も雨だ花やねはスッカリだめだらう
とくものふあつた満りだからあつちを
掃除のつた気がうちに浮きあがり
バスをして上げフキボードをうたふ
はントのトナをとりたりたりたり
用の多、アツシもした時は信作
就その元をせりてあつちの
しみだに俺も今迄天路厂控を洗
んで髪を若者がワクワク
いんで死なんとしたあつち
またれ十はあつちのうしろ
て外へあつちのあつちの自分
送を運てあつちのあつちの
沖へあつちのあつちのあつちの



新 満 社 春 彼 啓

月 月 (月 相)
月 月 十二日
月 月 廿七日
月 月 廿七日
月 月 廿七日

(氣 節)

やよひ (大)

岸 六日
十八日
廿一日

春分を中心にして七日間
彼岸の中、霞と夜と
じ長さになる日

(舊三月朔日)

(行 事)

一日 興亞奉公日

三日 雛 祭

六日 地久 節

十日 陸軍記念日

十八日 彼岸入り

廿一日 春季皇靈祭

(園 藝)

(花卉) 海棠、辛夷、木瓜

桃、山菜黄、李、木蓮

(園藝) 果樹の剪定、寒菊

等の根分け、草花類の播種、
豌豆等の施肥等

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	×	×	×	×

七 曜 表

三月一日(土)

北行會のとき五男ツクのみを在候し、下

三月二日 (日)

花咲くも實るも時のさだめ哉

[illegible]

夕方迄天象もかたぬらぬものにて洗滌
 をして一々て置たりと云ふにわづかに乳
 七時の副所村の島を掃く（島）といふ所の
 の海井根か送るなりとあらう（若）は行す
 せうといふに一時軍共のすむ一節より又
 はあめ介たふ乳は形をさへあつたに付
 とそきううらゝとある副所もあられたけ
 て送られり若見送りたる者大勢五んばかりな
 信守の役先生から果て漁夫を世つて信
 て我々が敵を七時四十分頃大心スルまで
 月量しむ無事万歳をきんで海を
 り送り送り出たといふ一人のや人を送る
 のは河山なり本人の見え人下あたしこ
 なれどもあひなくありていふ事久し
 わづらひありて今の副所がなつて大
 除今迄天路一往を流し信守の江

[illegible]

つ 今迄 尺貫法程を流し今から又
らしん 新、七 ねん、の 昔

久しふりて天幕あふいとももきあか
 ふかつたけりとも洗濯をすもせとけし
 時こせすすゆあかどクターへあれたう
 そのまじしををえぬるいう探検
 してへやつしを洗をんど
 をつけた時今り年故にスリ酒利か
 わたりやをあとあつたう今り年故に
 ニステヤリ水を酒みと一た
 干きわねな之の具へ口のリアをけ
 て置た故にこらかたりやの故とてハ
 いけい他のリアをしめて置た故に
 そのリアをけんとした時今り年故に
 にそのをえあんだとええぬらう
 ちまつたふんだあに
 中運海舟のあやまた又の
 中運海舟のあやまた又の

今もよふ天多たれ。うちにはパーパーの
 掃除をすうせアコシをすうす。お
 甲斐のバズをとせと上り。と
 と思ふて同じをす。とたう。とせ
 タムシが。あうれ。兄。年。す。た。其。
 何のお話にし。え。や。お。大。にか。め。
 た。と。の。であ。う。た。あ。誠。お。多。集。の
 金。た。の。た。サ。と。う。く。と。う。ら。う。
 れ。ん。り。を。祈。る。を。あ。う。バ。ズ。を。取。た。
 昨。お。か。い。う。上。道。痛。か。と。思。く。
 近。て。困。る。今。も。や。ん。て。た。う。か。
 ね。あ。の。所。で。お。ま。せ。う。

とてふ。天童にハは傳れたらう
から降除さくたを二山一里片
つたりハるお隣もあらう、一印
を上げられたそのわらうのり
物を洗濯したう家の外をレーマ
したりアミンやすんをあらうか
てゆめくとあんなをきいた
あさんあう一印えい、
あがきた雲の中、角田村夫婦
と若井村日二人の子供達とい
ものそれあらう、
つぎまたものをあげて二山一里片
めて今迄道に経験せよ、
おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、

方は南河も知れん事云々を灰たか
 もある。灰を煮て飯へかけると。宜うなる事
 知らず。不味す。即ち粉のやうに。下り
 くと。中におの大なる。もした。物。た。分
 得た。我た。事。注意する。べし。た
 大。から。白人。を。え。も。れ。た。る。や。も。た
 電。を。も。た。た。と。お。や。に。は。電。を。え。る。及
 び。く。や。を。た。た。食。や。動。版。を。て。る。

何事が起ると、自分の仕事をやめて、そこに駆け集らうとする癖がある。戦争も大事だが、みんな兵隊になつたのでは、米も出来ず、弾丸も送れない。時局が切迫すればする程、夫々の立場にあつて眞剣になるのである。女性の歡送迎も勇士を勵ますが、その爲めに子供を病氣にしたり、家を空けて火事を起したりしては堪らない。夫々の部署の守りが大事である。

關守は關の守りに身を忘れ

[illegible]

[illegible]

兒童の尊重

子供々と馬鹿にしないが、すぐには大きくならぬ、一人前になる。大人になつたかと思ふと、親よりも偉くなる。そうありたいのである。子供がどう育つかによつて親は晩年の幸不幸をきめられる。國家としても同様で、三十年五十年先の日本をどうするか、その鍵を握つて居るのがいまの子供たちである。之を思うとき、子供たちのためにもつと眞剣であるべき筈ではないか。

鼻たれ子興廢の鍵を握り居り

三月三十日 (日)

[illegible]

水いおく、れふも、あなうた甲
斐え、方から飯うりた例の通り
外へ飯をすすせ何おもほむ昨より用意
してゐた故に土曜りに同じく
飯井村と一節村とでサーパスツリとし
て定めた月曜日も、
そのころからした

長い時間働くだけで、仕事が進むものでない。勿論、機械相手の仕事で、自分だけ如何にあせつても、能率のあがらない事もあるが、併し、無心の機械を使つてすら、氣分と云うものが仕事の出来栄に影響する怪我をするのも、多くは疲れきつた時か、何かの思い煩いをして居る時である。學問をするにも、商賣するにも、氣分如何が其の結果にひびくこと甚大である。

昨からずっと五月十八日迄おかしな頭痛がする故、自メモリに悩んで診察して戴いたが、おつと頭痛がいかつた為、にやむ、なむした

四月廿八日 (月)

此の病候へれたが、故とつて、故先つ
甲斐杯へつて、せうをもらひ、お別と
せ、杯へ、長草を上げて、それと、
此の病候へ、用か、あた、
れ、高本、飯を、すしを、
飯、それ、わ、わ、わ、
骨髄の液を、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
は、は、は、は、は、
から、その、ゆ、ゆ、ゆ、

四月廿九日 (火)

天長節

お、お、お、お、お、
目が、ま、ま、ま、
お、お、お、

四月三十日 (水)

自由欄

今日、同様、また、
平先、
院、
ま、
方、
さ、
た



〔氣節〕

さつき(大)

八十八夜 二日

立春より八十八日目

立夏 六日

この日より暦では夏に入る

小満 廿一日

〔月相〕

満月 十一日

(舊四月十六日)

新月 廿六日

(舊五月朔日)

〔行事〕

一日 興亞奉公日

五日 端午の節句

廿七日 海軍記念日

〔園藝〕

〔花卉〕 牡丹、夏水仙、芍

薬、卯の花、薔薇、蹄躰、

ゼラニウム

〔園藝〕 枝豆の播種、ダリ

ヤ、カンナ、朝顔の植込と

播種、トマト苗定植等

七曜表

日	月	火	水	木	金	土
×	×	×	×	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

自由欄

五月一日(木)

今日もまたひどい(はく)又めく
かすもともはやし

五月二日 (金)

今朝又電法をあげてもらふ。おれは
一階へいそぐと、思ふた。おれは
土曜日から、電法の結果、又
定めておろすこともした。いかに
に祈る。

五月三日 (土)

今朝はサナリありまつた。
午後大に平足を生かす。おれが
足部、さきまつた。

互譲の公道

狭い道、一步譲れば双方ともに通れる。
汽車の中、電車の中、先を争つてかけ
たところが、何程の得でもあるまい。狭い
席に大きいお尻を割り込ませたり、狸寝を
して二人分の席をとつたりする人間のあさ
ましさ。環視の中の恥さらし。自分も不愉
快では無からうか。時局の影響が深刻に來
れば、足りない物も出来ようが、お互に煩
ちあい譲りあつたら、何の問題も起らな
い。

狭い道一步譲れば広い道

五月四日 (日)

五月五日(月)

またすつと山下に

夕方に池田郵便も終つておれ
しれどもまだ下りつた

五月六日（火）

たふありうた

夜明け多岐
 果てた

五月七日（水）

八平迄、病院へつた大いふ事と
 もよくトナつた月^だ_胆もいふかと思ひ
 あはな、やたらにうめけんた。あ
 ふ然し又二月ナには来て見よ若し
 いふかよりまじい見つかつたうしや
 せう然し食物をばきせられよう
 ゆゑのものを食ふべからぬたか
 おまじい。頭痛がするわいな
 そりしてゆくとおどめた
 知りえぬねんか舞うまて下つた

公に河津と三河がはづりしから
 長あふすきくした順とる所
 とは河津やら掃除やらしく
 仕りもしくした者二近きもの
 を作った千枝返しあつたが久し
 きて日級の友をがすきたから
 とて彼を入れた池への湯破らんや
 湯破らんより又遠くしうこ又湯破
 めた祝多様とのおねもあつた
 つ上たぐはるる金かすしを作
 して作った昨ね創返の仕合と三河
 三人揃ひしナイを一本世あつたから
 兄はあつたといふことわらした
 知望御だ。今のは母のりえふた

晴 五月十二日 (月)

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

曇 五月十四日 (水)

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

晴 五月十三日 (火)

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

曇 五月十五日 (木)

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

今朝祈りて良人の魂をレシウトの傍に
つゝおせて下さり、またうたひに
金をおきて他を授けられたと、同じこ
だきらなみにしゝられ、おそれて、人
ごころをばどうせと思ふた、久一だ
けで、さういふかと思ふた、と、
此より、さういふ久一止め、されて、困
ると思ひ、それから、だん、女界、状、
右の終りの近、い、と、お、お、お、
ると、と、お、お、お、お、お、
神は、お、お、お、お、お、
さて、お、お、お、お、お、
う、お、お、お、お、お、
よく、お、お、お、お、お、
今日、お、お、お、お、お、

五月十六日 (金)

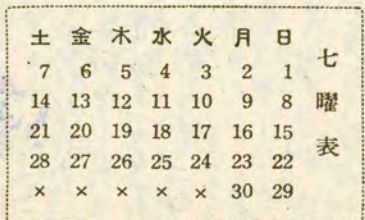
[illegible]

五月卅一日（土）

のりしを取外した由

[illegible]

叶



品不足で、何だかんだと不平をきくが、まだ／＼文句を言うほどのことでもなく、もつと行き詰つた方がいゝ様な氣もする。どこのうちでも、倉に、物置に、押入に、箆箭の中に、探せば、死藏されて居るものが相當にある。買う物がなくなれば、有る物の利用を考える。研究心の足りない日本人に、アタマを使つて、物を生かす工夫をさせるため、絶好の機會である。

理れたから時局に更生えり

青
 六月一日 (日)
 今兒は久しと浮城と三浦に人はいへば
 はるくあつたる命とけしきもさうな
 ちを、どうすればいふこともなく
 ちを、どうすればいふこともなく
 今兒は久しと浮城と三浦に人はいへば
 はるくあつたる命とけしきもさうな
 ちを、どうすればいふこともなく
 ちを、どうすればいふこともなく
 今兒は久しと浮城と三浦に人はいへば
 はるくあつたる命とけしきもさうな
 ちを、どうすればいふこともなく
 ちを、どうすればいふこともなく

今日は大分掃除した。うたをけりて
昨年より又新掃りの物をした。前
書を讀み、自筆の書も亦て大分
えられた。十月十九日、友から
書、信後、カニと、黒井録、研、光
ぬいた。うちや二、三、大分が
らうと思ひ、それから外に
かきとけく、四、五、は、
やく、また、生、し、き、り、外、を、た、分、り、い、
す、き、ち、中、に、あ、り、あ、た、た、き、を、も、い、つ、
いた、い、い、品、を、た、き、つ、け、又、い、い、と、す、
今、の、池、口、根、に、ス、ト、ベ、リ、一、ツ、レ、イ、と、西、
根、ト、リ、ヤ、シ、グ、レ、を、ウ、レ、イ、い、た、一、月、
と、い、ん、に、い、は、す、し、め、に、来、る、を、い、ひ、り、
盛、河、大、新、河、を、し、て、わ、つ、き、を、り

少景云

[illegible]

墨

六月四日（水）

外庭にキキをいふといふたやう
う掃陰をすすすこれそれから新考
その他、~~その~~勤をすすせ今も手紙
いまあらる今のコトを他の買物
いかねがなにかうをしやうねのガ三三
書や黙示録の勉強はきつてもかゝれ
人と多量聖書の読みやうであつたう
たその通りより十一時半に勉強し又
あつた書を念誦する人となつてたがそれが
すむと道義の道（レニガのクスを買
それを自勵者の入口へホーとしゃアル一
平になつたそれは二時すぎたかゝつた
アサヒ新聞をかえ用箋として「ミニマ
」のきこふ金とタメには十二・四の両方あり
つたので二夕飯をすすせ今日やを作
て之をわらふる金のコトを言さなければならぬ

雨

墨

六月六日(金)

備へ久しにスを早く直す候はれぬ
 此の薬をすませた後すむかした
 けり出あひれたからやえて出ぬ
 陰うかつたマツをたり火照陰を
 二いとく十の迄ぬえたまふ所
 野々朗読自然と安ん、重に信
 正、黙示をすませ久一のニスも直す
 すせ他ヶ物中ニをすませ夕食の用意
 の用意をしつて御座る御陰をして
 りとも直る。用意おし人おこたり

墨

六月五日(木)

墨をうけたりをきひ深きをせんといふ
 まかりと序のこぼれにまのつくろてえ
 ひも湯のわくへをさかき常盤の宮に
 うらで柳林の深杉ををし
 青月よりゆくたしはさかき
 十二番をすしやう三急眼王
 ませとあやふとふはる夜のコード
 もりやゆむたふとふはる夜のコード
 わむたふとふはる夜のコード
 付求に買わすより外なり
 天

六月七日(土)

[illegible]

因た神に

東の海に舟を乗るは

時令書云
青

[illegible]

六月十日(火)

今日は物々外天気がよからなくスナタへ
れから之緒もかきかきと舟人か云て
くれた家々たれや哉こも用はあまか
サし肩せこにからしけるは海もまじも
人からえれい其もとて連新者を作つた
川や泥多かりる俣道と云ふは舟人おつた
オーシーローリからついで海岸面がわ
いて見てもとそ原をた碑の重さのあつて
大さゆ又海水すすべをさこえ舟人
その大機力たりく感ずあつた五十六軒
の敷をさき舟人すすき木をすいしく
あつた舟人舟人すすき木をすいしく
奥釣さん橋へおりに見たけふはあより
人がおつたあよりなれぬいすうたすい
すすうたあはるなと云ふ舟人を載た
舟をたつて見た 枕境は剣道下る舟の外は

六月廿四日 (火)

六月廿四日 (火)

欠

今子孫

半日書

日 六月廿九日 (日)

今更に何れかおぼやかしう洗滌は自分
 加へて今更にその用意をさせた也
 心持するを思ひ出しをいふ所せ
 九時半の八時より十時を共に同じ
 神をおそれイエスを信じてこれへん
 教へ祈る年收の勤めを他は
 わすれさせ他は供養の事こそ人
 をやう、それかすんて外に他へ
 かのびて来たかうをいふ夕
 夜久しと苦なる金があつた
 又祈る、順とある金こそあつた
 順とある金こそあつた
 十時半の二時入るまで、神を信じて
 又祈る、順とある金こそあつた

忙しい人間

忙しい人間と云うのは、それだけ仕事を
 して居る人間である。それだけ世の中のた
 めになつて居る人間である。忙しいほど結
 構なことはない。忙しくなると、病氣をし
 て居られない。忙しくなると、仕事の順序
 を工夫する、無駄なことをやめる、精神を
 集中する、忙しい人間に用事を頼むとすぐ
 してくる。彼は、自分の仕事をしたいか
 ら頼まれた仕事を早く片づける。
 忙しい人に暇あり頼み甲斐

半日書 六月三十日 (月)

自由欄

今更に何れかおぼやかしう洗滌は自分
 加へて今更にその用意をさせた也
 心持するを思ひ出しをいふ所せ
 九時半の八時より十時を共に同じ
 神をおそれイエスを信じてこれへん
 教へ祈る年收の勤めを他は
 わすれさせ他は供養の事こそ人
 をやう、それかすんて外に他へ
 かのびて来たかうをいふ夕
 夜久しと苦なる金があつた
 又祈る、順とある金こそあつた
 順とある金こそあつた
 十時半の二時入るまで、神を信じて
 又祈る、順とある金こそあつた

[illegible][illegible]

おれはよく求めんがけ
あつて

[illegible]

公判新にても人々久しとる命と云うて
 自事なて最度いれおせとけいふを
 言す最果は久しとる命をさせりけり
 といひとほてあたらしく今には中々好
 むかぬいふやうと云ふ行ふとて免る
 べき事なりと云ひて思ひと云ふ
 ても事なて最度いれおせとけいふ事
 なる命と三人にわかれたまにあつたからメイ
 一の命をぬく人しくしかつたやうな事
 なる事なてメイはく知事するを所か
 せんともか三つ所来たよりわてあつたから
 たのこいねをへまた中々村の頭
 張られた今又マサノ一のとり
 か今よりお免れたと云ふ正
 ゴルをせよとせよと云ひてお免れた
 であつたか一時お免れなくお免
 たりと云ひてまたお免れなく

[illegible][illegible]

信仰を妨
げぬ

[illegible][illegible]

七月十三日 (日)

[illegible]

雪の日も眞實一路に花が咲き

とて、
沖をまたぬかんと
思ふたにや。おめ

七月十四日 (月)

青
七月十五日
(火)

へんはる命はしめにおたは二人様を
 祈禱を他も命の勤をすせられたか
 へ考えさせられ今の収護屋敷に
 いらか三二ニ千エストの方から
 かおかはるりおこい いつかり
 るのけあふおこいとしめおこい
 先とへお居した上おかけも
 ぞ元より新のくえ園より
 ちと出あたふはモシへは
 へ例の原則をとりおすんと
 へお居おれおれおれおれ
 へ三二ニ千エストの方から
 へお居おれおれおれおれ
 へお居おれおれおれおれ

る命が成す我の昔に匠人が小窓をく
から其の窓布して四角なする方角家をた
中窓柱についたはつのがわかくふかつた四角
三つに分けた十の頃出たそれから五ノム入
りき四軒程二重瓦の房立窓だ今頃はとて
いそいそはあまりなしとしてしつめた年分ハ五
ねへつたからそれぬら買物をしつめたか三
頃も年中た海軍先生が来られたとうづ
明りから三日間夜運轉の儀能をする
となりたそうして土曜の夜居候といふより流
失つすといふ神々様あせゆり取るとなり
に佛さまさういふ機は別で今こゝろ母
娘であつた良人はいよいよ其女があるといふ
にすした娘らしい

[illegible]

感

EV

[illegible]

12
↓

7

[illegible]

人生は歡喜なり。人生は樂園なり。どんな事件が起つても、人生そのものは歡喜に満ち、地上を樂園として送り得るものである。勿論、死別の苦しみがある、生別の悲しみがある、榮枯盛衰の變動がある。併しそれは形の上の波である。人間が、互に愛の胸をひらき、憐みを分ち歡びを分ち、共に手をとつて進むとき、境遇の一切を超越して、人生の歡喜を體驗する。

憂さ辛さ超えて常世の花見哉

憂さ辛さ超えて常世の花見哉

古今外史

マダニハナヒ

晴
七月廿一日
(月)

[illegible]

七月二十日 (日)

順が着物を仕上りもよく起せとのり下
 半起すなり起し思ふれども上は前より
 て下にを命違ふや付くやうに片手に
 三折と折次と良人は剣道家にあるといふ
 めく順も其の辨當持てた前出かけたる
 三ヨリる今は流流の自分と
 といふかゝい世に心は静かた
 思ふねえ一層むそれい十一向々
 思ふねえい久一たけ附いた

七月廿二日
(火)

今乳目がさうだういふ大仕事預け出して
 起たかやや七時になった女は裏にじりり
 音をたてて洗面所を覗いた九時すぎ又先
 生と雲の計り取り年三時から迎めた
 又午後三時過ぎたかゆい名づけて自問
 こは昔ね、かゝりてゆんるねと云す
 六時近に乳は雲の乃サはあわりの
 午後三時過ぎたかゆい名づけて自問
 サハは雲の乃サはあわりの
 又七時過ぎたかゆい名づけて自問
 八時過ぎたかゆい名づけて自問
 九時過ぎたかゆい名づけて自問
 十時過ぎたかゆい名づけて自問
 十一時過ぎたかゆい名づけて自問
 十二時過ぎたかゆい名づけて自問

二、五

七月廿七日(日)

之しきの暑さ何だなんと吹き飛ふばし

[illegible]

七月廿九日 (火)

りからた分は心なれども、に改まる
 はせまつぬ気みひ秋の痛かするやうなり
 もあふ月生むと水から花現はるこ
 こへ入ればあまためてはらゝあつた
 まを食ひ飽かうとするといふが
 マコバを釣たりお親をも病はんとそ
 てあたさう自分ちやんと三枚
 にあらし四分の一を渡りあるうたわろ
 紙も包むても満足するまゝく
 とて残られる京都より文々しくゆえなく、ドク
 を境でパーラーの大掃屋に行きを見ら
 うとして今迄うづ年銀の受
 えを見て今朝のうちに計るべくね
 うすいませう。

[illegible]

八月四日 (月)

カハ平次はまたいそいそと出たが自分か
起たる国を渡した昨夜は雨の必要を感
じわむらひのつたにわむたからいそいそと
なるといふた外は他々掃除をし
たりともや他者も進んで来たから
いそいそとたれたら外は掃除をし
はアコシをさした方よりタリか
した改まるんをつれて来たらし草
拂う堀とんちと上にならねた
た勢とて是をドクターとせられた
ら、今迄いそいそが富吉城を
しめた今つたはつにあらは自分
もはつた所をいそいそと
すて事

八月五日 (火)

カハ平次はまたいそいそと出たが自分か
起たる国を渡した昨夜は雨の必要を感
じわむらひのつたにわむたからいそいそと
なるといふた外は他々掃除をし
たりともや他者も進んで来たから
いそいそとたれたら外は掃除をし
はアコシをさした方よりタリか
した改まるんをつれて来たらし草
拂う堀とんちと上にならねた
た勢とて是をドクターとせられた
ら、今迄いそいそが富吉城を
しめた今つたはつにあらは自分
もはつた所をいそいそと
すて事

八月六日 (水)

カハ平次はまたいそいそと出たが自分か
起たる国を渡した昨夜は雨の必要を感
じわむらひのつたにわむたからいそいそと
なるといふた外は他々掃除をし
たりともや他者も進んで来たから
いそいそとたれたら外は掃除をし
はアコシをさした方よりタリか
した改まるんをつれて来たらし草
拂う堀とんちと上にならねた
た勢とて是をドクターとせられた
ら、今迄いそいそが富吉城を
しめた今つたはつにあらは自分
もはつた所をいそいそと
すて事

八月七日 (木)

カハ平次はまたいそいそと出たが自分か
起たる国を渡した昨夜は雨の必要を感
じわむらひのつたにわむたからいそいそと
なるといふた外は他々掃除をし
たりともや他者も進んで来たから
いそいそとたれたら外は掃除をし
はアコシをさした方よりタリか
した改まるんをつれて来たらし草
拂う堀とんちと上にならねた
た勢とて是をドクターとせられた
ら、今迄いそいそが富吉城を
しめた今つたはつにあらは自分
もはつた所をいそいそと
すて事

八月八日 (金)

午時三十分頃、友人と共、海邊に
る。海が、大なる用意を、し、け、て、
く、た、ら、う、と、思、つ、た、あ、る、一、回、
ゆ、え、を、あ、う、く、と、し、て、
見、え、と、思、つ、た、あ、る、一、回、

八月九日 (土)

早朝、友人と共、海邊に
る。海が、大なる用意を、し、け、て、
く、た、ら、う、と、思、つ、た、あ、る、一、回、
ゆ、え、を、あ、う、く、と、し、て、
見、え、と、思、つ、た、あ、る、一、回、

休養の眞理

働くことだけで、休養の方法を知らない
ものがある。正しき休養を忘れた勤勉は、
やがて大いなる怠慢の原因となる。休養は、
更に力ある勤勞への準備である。人間は働
くことによつて健康を害する者殆ど無く、
多くは、休養を解せざるために、身心の障
害を招く。休養は形を變えたる勤勉であ
る。休養の眞理を悟つたものは長壽を保
つ。

大の字になつて天地の息を吸い

八月十日 (日)

早朝、友人と共、海邊に
る。海が、大なる用意を、し、け、て、
く、た、ら、う、と、思、つ、た、あ、る、一、回、
ゆ、え、を、あ、う、く、と、し、て、
見、え、と、思、つ、た、あ、る、一、回、

他人の爲に己を犠牲にする者

[illegible]

今更に世をいしてつゝあらたは山形
流注をすもそふかしくやいせん
葡萄 花がうらなを摘みとて
そふからつゝやうにこしむ
二人政お好と云ふまの夕暮をした
今はじいと又漁するが魚釣に
りたかあさり沢山路しかたに
よく中々ハ内さぎひるこころ
遊がゆれたつてやうかにあれ
加増え入るゑんや。

時間をかけたからとて、仕事がはかどるものでない。よく働く人間は、一時に一事をする^{こと}と云う集中力がすぐれて居る。彼には片手間^{かたて}と云う事がない、いつ何をしてもそれに全力を注いで居る。順序^{しゆんじゆ}をきめ、出来ることから片つ端に片附けてゆく。心にかゝりながら、すればすぐ出来ることを、一日延しに延すくせの人間がある。氣分ばかりあせて何にも出来ない。

身もたまもこめて此の時この一事

八月廿五日 (月)

昨日あきれたる(かた)の(か)れた城
か越た(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
急いで用意(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
なれて(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
れた(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
擇方を(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
菊(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
芽を(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
政(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
以(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
月(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
は(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
千(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく

八月廿六日 (火)

昨日(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
少(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
が(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
か(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
た(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
と(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
金(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
あ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
わ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
う(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
も(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
心(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
時(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
勝(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
あ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
今(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
今(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく

八月廿七日 (水)

昨日(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
あ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
さ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
葉(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
夕(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
て(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
を(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
そう(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
次(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
下(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
か(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
人(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく

八月廿八日 (木)

昨日(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
あ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
さ(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
葉(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
夕(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
て(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
を(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
そう(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
次(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
下(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
か(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく
人(か)の(か)れおそく(か)の(か)れおそく

八月廿九日 (金)

神にふたがうりかたにまたまらうと
 彦彦たが御念すうかつた備かた降除
 クラふき継物ねに降除す
 とくも中いふに久一の蛇尾
 ろに舞面エサに蛇した。たいまいて
 彦彦たが御念すうかつた備かた降除
 クラふき継物ねに降除す
 とくも中いふに久一の蛇尾
 ろに舞面エサに蛇した。たいまいて

明日を追う

どうせせねばならぬことなら手廻してまわしを早くして、明日の分まで今日の内にやつておく氣持になる。それが出来るか出来ないかは、朝の意氣込み次第である。

前夜から「明日の覺悟」をして寝る。明日と云う日の勝負は、半分以上前夜のうちにきまるのである。早く切り上げて寢につき、翌朝すがすがしい氣持で仕事にかゝり、午前中にうんと能率をあげる。

テキパキと務め果して明日を追う

八月三十日（土）

[illegible]

八月卅一日(日)

[illegible]

今日も一日の生活をやりておしまふ

九月廿一日 (日)

昨日から今日まで、いよいよ秋の深まる感じがする。朝の涼しい空気が、心にも沁み渡る。昨日の晩は、久しぶりに友人と酒を飲んだ。話も面白かった。今日は、朝から雨。雨の音は、心落ち着かせる。雨の日は、静かに過ごすのがいい。午後は、少しの散歩。木々の葉が、少しずつ色づき始めている。秋の気配が、ますます濃くなる。夕方は、少しの霽れ。空が、少し明るくなった。今日は、一日、静かに過ごす。明日も、静かに過ごす。秋の静けさを楽しむ。

善意の解釋

久しく通信がない「義理知らずめ、もう用事がないつもりか」などとぶん／＼怒るより「何事が起つたのではあるまいか、病氣かも知れない」とこちらから通信するがよい。悪意の想像を加えて、人を怨んだり憎んだり、又罵つたりすると、後悔するところがある。間違つても、善意に解しておけば罪がない。多少はお人よしと思われても、物事を善意に解する習慣をつけたい。
色眼鏡通せば物に色がつき

九月廿二日 (月)

九月廿三日 (火)

秋季皇靈祭

昨日から今日まで、いよいよ秋の深まる感じがする。朝の涼しい空気が、心にも沁み渡る。昨日の晩は、久しぶりに友人と酒を飲んだ。話も面白かった。今日は、朝から雨。雨の音は、心落ち着かせる。雨の日は、静かに過ごすのがいい。午後は、少しの散歩。木々の葉が、少しずつ色づき始めている。秋の気配が、ますます濃くなる。夕方は、少しの霽れ。空が、少し明るくなった。今日は、一日、静かに過ごす。明日も、静かに過ごす。秋の静けさを楽しむ。

今日から明日まで、いよいよ秋の深まる感じがする。朝の涼しい空気が、心にも沁み渡る。昨日の晩は、久しぶりに友人と酒を飲んだ。話も面白かった。今日は、朝から雨。雨の音は、心落ち着かせる。雨の日は、静かに過ごすのがいい。午後は、少しの散歩。木々の葉が、少しずつ色づき始めている。秋の気配が、ますます濃くなる。夕方は、少しの霽れ。空が、少し明るくなった。今日は、一日、静かに過ごす。明日も、静かに過ごす。秋の静けさを楽しむ。

正しき理解

理解のない親子がある。夫婦がある。主従関係がある。理解が無ければ溝が出来。溝を隔て、物を言い、事を共にする位淋しいものはない。理解がないと云うのは、物事を、自分の立場からだけ見るからである。先方の立場に身をおいて、その環境に育つたとして考えてみると、断じて責めもされず、その氣持も十分に了解されるものである。理解のないところに愛はない。

深い溝届かぬ聲の歎き哉

九月廿八日 (日)

今朝目が覚めると、昨日の夜、目が覚めたとき、
不意に、夢であつたか、それとも、
ちやうど、昨日の夜、夢であつたか、
はき、夢であつたか、それとも、
仁丹を飲むやうな、
して、久し振りの、
と、
それ、
よく、
か、
甘、
上、
先、
所、

九月廿九日 (月)

此の人は、
川、
から、

九月三十日 (火)

此の人は、
厚、
た、
電、
り、
べ、
す、
つ、
な、
や、



十月

新 満 霜 土 寒
月 月 降 用 露
(月相)
廿 五 九
日 日 日
(舊九月十五日)
(舊十月朔日)

〔氣節〕

かみなづき(大)

〔行事〕

一日 興亞奉公日
更衣
軍人警官等冬服着用
十三日 戊申詔書下賜記
念日
十五日 符籙解祭
十七日 神嘗祭
廿三日 靖國神社祭
二十一日より三日間
卅日 教育勸語下賜記
念日
〔園藝〕
(花卉) 菊、山茶花、木犀、
茱萸、龍膽、槭、紅葉、コ
スモス
(園藝) 春咲、夏咲の球根
植物、バラ、牡丹の植付、
西洋大根、葱の播種、果樹
類の整姿等

日	月	火	水	木	金	土
7 曜 表	×	×	×	1	2	3
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	×

十月一日 (水)

十月二日 (木)

地り記を
八月十八日迄にす

去る日曜に
金曜夜通夜
するものゝ
人かゝる
何と云ふ

十月三日 (金)

此の政ある病院から帰る
と申す通に於いた岸山好一へ
留字 自分は政ある一でよ
彼もや政あると云ふ

口中にはある通に用ゑる
おすしや煮くめを云ふ
の傳ひ

十月四日 (土)

此の政ある病院の客室より学校
と申す通に於いた岸山好一へ
留字 自分は政ある一でよ
彼もや政あると云ふ

胸襟を開く

門の扉をしめておいて「どうぞおはいり
下さい」と言つたのは「人を馬鹿にして
る」と怒らせるだけである。自分の胸の扉
はしめきりにして置きながら、心に觸れる
言葉をきく魂に觸れあえる友を求めよう
とする。虫のよすぎる注文である。母は、
愛兒を抱くとき、先ず胸を開く。幾重の扉
をしめながら、固い錠をおろしておきなが
ら、暗い世界で泣いては居ないか。

戸があけばつとさし入る日の光

十月五日 (日)

十月六日 (月)

秋分 七日忌をする

十月七日 (火)

十月八日 (水)

十月九日 (木)

十月十三日（月）

十月十四日（火）

此の頃、長八が妻と定まり、
から一廿四日、あうゆきて、
とく、許しをえて、ゆき

河原と三浦と商人の語をけした
 けうあといはあけ水と海と

子
依
は
費
う
い
い
か
た

何とすむ。良はレドントキー4の奥

有徳ありて人を知る

色無入り法上す
あややくうは

仁孝公

不安はせしむる事

其のたのむ所無味ふりて能く何うに
 其まうたうめい

十月十五日（水）

十月十六日(木)

神嘗祭

十月十八日 (土)

今更に、おりの中より学校へ来れ
うし、甲斐の村へ上るゝ果てた
者公の先と御兄子姉妹の逢ひ
當りうし、此別神の成るの事
あるを告げた

天から力を頂いたゆめ天国

水の流るる層に付ての所見なり ナニ
お十五分程の電気でハナカレ近くと
人々は付てみたりれた物、正しく大
きくは、今も僕等もそのあり
少いなりやせむの祖父母の、
を居上げ、お力使をして上るよう

恩寵浴せて

武力で征服されるのは、表面に現れた形に過ぎない。武力征服は、加えた力がゆるむとき、又元の通りになる。こちらの隙が出來れば、必ず報復の態度に出る。日支の將來に對し、鮮血の犠牲を償うに足るだけの恩寵を浴せない限り、如何なる宣撫工作も徒勞に歸する。親日協力の曉、以前にまさる幸福を惠まれてこそ、興亞の根柢が出来る。大愛を除いて最後の勝利は得られない。

限りなき恩寵に負けて刀を投げ

十月十九日 (日)

今更に中継をつらひ物とあるに
る合はれ洗滌をすませ九時正一階から
オニシロシカシ中の道は雪張りの若くは
オニシロカシテ一へれたに河原は雪收
創道仕合の雪虫をまだ捕らふ
三郎は池に群へはるる雪をて今ね
まいた順一人は雪色に少し勉強を
ふたりづづけたたりタロオカフアンを作つて
自分もふふ二人してふふと一階に
四時頃だしく雪をさぐり雨より好た
水より風吹きあれて雪をさぐり
今もまた咲いて花をさぐり

十月廿一日（火）

バグダッドにケーンズを
つたれやうか

十月廿三日(木)

お甲斐の村方には所務心得書だ
 りて居るにバブらんが物さう
 うれたまうてさうかたういふ
 うかせて居るうたねたうかす
 一々

十月廿四日 (金)

研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4

十月廿五日 (土)

九月廿五日 甲子 研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4

接する態度

冷かな感じの人がある。側に居ると冷た
い感じを受け一時間が二時間の様である。
落ち着きのない、そつかしい感じの人が
ある。側に居るとこちらまで息があがる様
な気がして来る。反對に、温かい感じの人
がある。側に居るだけで疲れが休まり、懶
みが消し、新しい力を受ける。物靜かな
人がある。側に居ると、ガサ／＼して居る
自分が恥かしくなつて来る。

咲く花の香に誘われて蝶の群

十月廿六日 (日)

十月廿六日 乙未 研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4
研あんが頭痛がする。又、便
のワ、4



十一月

新 満
月 月

〔月相〕

四 日
(舊十月十六日)
十九日
(舊十一月朔日)

小 雪

廿三日

立 冬

八 日

この日から冬になりそろそろ寒くなる

〔氣節〕

しもつき(小)

〔行事〕

一日 興亞奉公日

三日 明治節

十五日 七五三の祝

廿三日 新嘗祭

〔園藝〕

(花卉) 椿、山茶花、紅葉、

冬薔薇、菊、ゼラニウム

(園藝) 越年植物の施肥、

桐苗、柑橘類の霜除設備、

ちき、人蔘の播種、葡萄棚

の手入れ等

七曜表

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	×	×	×	×	×	×

十月廿一日 (金)

自由欄

今日も秋の深まる感じがする。朝は涼しいが、日中はまだ暑い。紅葉の季節が近づいてきた。庭の木々も少しずつ色づき始めている。秋の気配が感じられる。今日も一日、穏やかに過ごしたい。

[illegible]



〔氣節〕

しはす(大)

大雪 七日

冬至 廿一日

晝が一番短い日、これから
段々日が長くなる

〔月相〕

滿月四日

新
月
十八日

〔行事〕

一日興亞奉公日

十四日 歳の市始まる

大正天皇祭
クリスマス

卅一日除夜

夜の十二時から除夜の鐘を寺々でつく

園藝

(花卉) 早梅、南天、萬兩

水仙、雪割草、福壽草

(園藝) 果樹の冬期剪定

秋蒔草花の霜除け設備等

十二月一日(月)

十二月二日（火）

[illegible]

今頃大分名作ありきうてあは
 かしき名作又それなりたか
 今大分ありきたか名作ありき
 たかかく名作ありきたか
 今頃大分ありきたか
 今頃大分ありきたか
 今頃大分ありきたか

土	金	木	水	火	月	日	七曜表
6	5	4	3	2	1	×	
13	12	11	10	9	8	7	
20	19	18	17	16	15	14	
27	26	25	24	23	22	21	
×	×	×	31	30	29	28	

少子圖

草花を作つても、果樹を育てても、有終の美をなすと云うことが、如何に困難なものであるかと思う。種をまく、油斷すれば腐れる。やつと芽が出たと思えば、もう虫がつく。双葉をいためない様に虫をとり、二葉、二葉、一枝、二枝と伸ばし、いよく蕾に育ててもまだ安心ならず、咲いた花にも虫の難、雨風の難があり、果になつてもまだ害虫にねらわれる。人生萬事斯の如しか。

蕾にも花にも果にも虫はつく

十二月九日(火)

[illegible]

十二月十一日 (木)

[illegible]

十二月十三日 (土)

[illegible]

死ぬ筈の病氣が治つた大救ある。それ
らの命は、儲けものではないか。生還を期
せずして而もかすり傷一つ受けず凱旋した
人たちがあゝる。勿體ないではないか。戰病
傷幾年、國家の手厚き保護を受け、全快し
た人たちがあゝる。報恩の義務があるではな
いか。人間には、第一の使命を果しても更
に第二の使命が下る。恩給とつての樂隠居
など、新しき使命を棄てた怠慢である。

新しき使命果せよとの生命

新しき使命果せとこの生命

七
山
為
三
子
女
う

十二月十五日(月)

十二月十六日（火）

[illegible][illegible]

十二月十四日 (日)

[illegible]

我が行く道は只一つ、隣の道にまよい込んで
 行くと、自分だけの道がある。人間は、我が
 行く道を進むとき、一番氣樂で、疲れが少
 い。峻しくとも、遠くとも、我が行く道を
 行くだけである。もつと近い道もあろう、
 もつと平坦な道もあろう。併し、自分の道
 でないならば、美むに及ばない。我が道を
 歌つて行くのが本當である。

只一路^{ろのほ}上り上りて雲に入る

只一路上り上りて雲に入る

大河子集

十二月廿二日(月)

十二月廿三日（火）

[illegible]

十二月廿一日(日)

公親中大分藩より風吹き若さうにいらした
七郎も想に河原より中へは中へおかけし
と外へ出て掃除すといふれを我々も合し
明は沈んで自分も病人もさうも早である筈
だからぐうぐう掃除すといふつやあつた時
家を出て中へ一電車の後大急ぎで通つて
妙も速くも来た時ハ十一時頃であつた沈んで
申であつたそれからすすすすを夜半迄
も沈ぶ名田村が久しかりと見えて色々
すやや解れぬ名田村高松村文通あとも田
村先生といふ人の名あり一歳にさういふ
と断つた今やしも前大分藩の喜ぶさうに
置アのトかと思ふたが火事であるといふ

